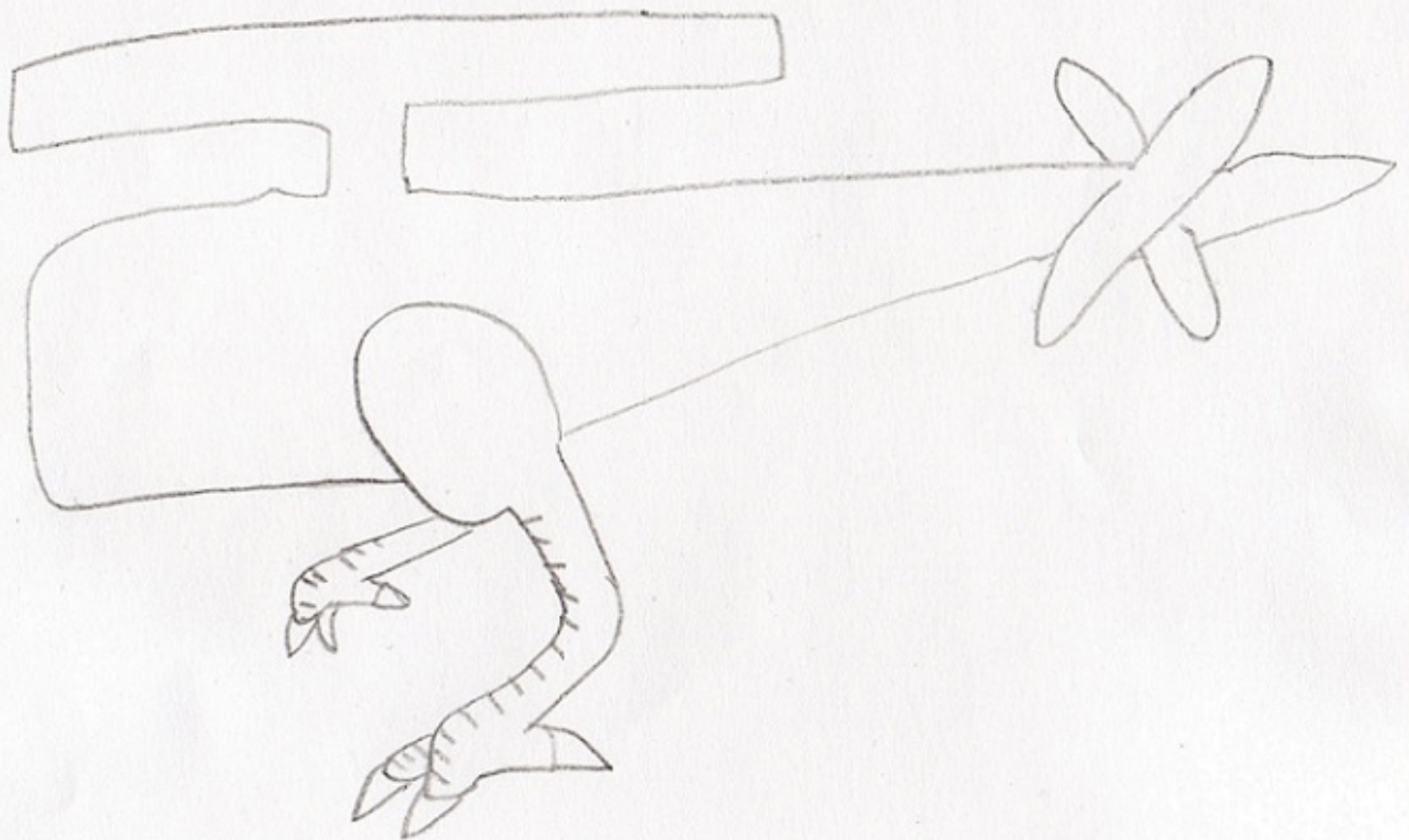


**シチュールで  
極端で残酷な  
短編集**



**足コプター**



\*全部フィクションです。お気になさらず。

目次

ツンデレ

野蛮食文化史

湖の幽霊船

床のからぶき

駅地下鮫

けへけへ

空気読め

空気読め2

プロのプロデューサーからの伝達

反抗期のビデオ

オルモスト11時

キスしようとしている落下中の二人

グロテスクモンスターズ

殻のある生き物

不適應なサルの顔

金が十分に貯まった

地球滅亡

地球滅亡2

地球滅亡3

もう寝たほうがいい

よくある光景そのたびに

有罪中学生カップル

有罪中学生カップル2

地球の負け惜しみ

嘘をつかない政治家

核実験のテロップ

裸の王様はわいせつ物陳列罪で逮捕された

命をくれてやれ

直ちに健康に被害が出るレベルではない

通り魔つあひゅっ

新入生歓迎会の思ひ出

透視ビーム

かぶとむし

白紙

夏の夜に窓を開けたとする

出会い

ベッドにはうさぎがいっぱい

かえるライフ

B級映画妄想 クロコダイル・ハンティング

読者の皆様へのお願い

「めし」

「ふる」

「ねる

・・・お前と」

完

今日の野蛮食文化史の授業は、日本人がかつて鯨を食べていたという話だった。

あんなに優しい目をしていて可愛くて、人間の次に頭がいい鯨を日本人が昔本当に食べていた、ということに改めて認識した。

21世紀の中盤に、世界中からの反対をやっと日本は受け入れて鯨を食べなくなった。そのときの成功をもとにして、その後は牛、豚、鳥、少し遅れて魚と、その他にも多くの脊椎高等動物が保護された。高等動物の生きる権利がやっと保障された世紀だ。その風潮を生み出したという点で、捕鯨の撤廃は歴史的に意義がある。

それ以前は本当に、彼らは家畜同然の扱いを受けていた。本当にひどい時代だ。当時は、命の価値はゴミみたいなものだったのかもしれない。

ローマとかギリシャ時代に奴隷がたくさんいたことは知っているし、もちろん他の時代の他の国にも奴隷はいた。奴隷が当たり前存在する文化の中では、奴隷に対して罪悪感とか憐憫とか、そういうのは感じなかつたらしく思う。奴隷は家畜だった。

21世紀頃の文献を調べれば、そのころにはもう奴隷制に反対する記録がいくらでもみつかる。奴隷制を廃止しておきながら、なぜ相変わらず高等動物を食べ続けていたのだろう。感覚がおかしい。鳥肉を食べて、気持ち悪いかかわいそうとか感じなかつたらしくか。あんなに可愛いのに。尊いのに。全く、昔の時代っていうのは野蛮で残酷だ。

当時は肉だけじゃなく、鶏の卵とか、牛の乳なんかも搾取していたらしい。彼らは子どもを育てる権利さえ奪われていたのだ。

平然と肉を食事に出して、それを喜んで食べる様子を想像すると胸くそ悪くなった。人の心ってものを持っていたんだらうか。無垢な子どもも肉を食べたのだから。殺されるとき、奪われるときの、罪のない高等動物たちの絶望感を考えることはできなかつたらしくか。

僕は、21世紀頃の初期古典アニメを面白いと思う。あんなにいい作品を作れるほど文化が栄えていたのに、高等動物を殺すことには罪悪感を持たなかつたらしくか。

僕は今の時代に生まれて本当によかった。

今は、高等動物を殺して食べるなんていう野蛮人はいない。「今から殺される」という自己の認識を感じることもない生き物を食べる。植物、貝、昆虫とか、あとミミズとかの環形動物。それに、ヒトデやナマコとかの棘皮動物、イソギンチャクやヒドラとかの刺胞動物なんかも食べる。

前に、牛を食べたというカルト宗教の教祖が、とてもおいしかったとっていついたらしい。それで今は病院に入れられているらしい。あんなに優しい目をしてる牛を食べたおいしいだなんて、本当に狂ってる。

しかし最近、昆虫とか植物とか、日常不可欠になっている家畜の生きる権利を主張する団体というのがいくつも出来てきたらしい。未だに飢餓問題が解決されず毎週一千万人もの人々が栄養失調で死んでいるというのに、不可欠な食料を食べないようにするなんて、本当に馬鹿じゃないのか。人間の生きる権利よりも、家畜の方が大事だっていうのか。ほんとに馬鹿だ。

## 湖の幽霊船

---

近くの山。友達の家裏の山。みんなで登って遊んでいた。木の棒を持って、振り回し、蜘蛛の巣をつつつきながら登った。ざくざくと落ち葉を踏む音がした。

そしたら湖があって、真ん中に幽霊船が浮かんでいた。みんなは静かに驚いた。気道と肺がこわばった。霧がかかっている、その奥に見えた。廃墟みたいにぼろぼろだった。

沈黙して、呆然と幽霊船を見た。

どうしてこの山の中に湖があるんだろう。そんなの知らなかった。

そしてなぜ船があるのだろう。

誰が何のためにどうやって持ってきたんだろう。

なぜ沈んでいないんだろう。

水面には鏡みたいに、幽霊船の像が映っていた。波一つなかった。上下対象だった。

空気はひんやりと湿っていた。みんなの皮膚は全部逆立っていた。全身の皮膚には冷気の層が、セロハンテープみたいにぴったりと貼り付いていた。

怖いもの知らずな活発な男の子が言う。

「よっしゃ、ここをみんなの秘密基地にしよう！」

みんなは声の大きさにぎくつとする。みんなはすでに嫌な予感みたいなものを感じていた。「腰が抜ける」と「背筋が凍る」のちょうど中間みたいな感覚を帯びていた。

女の子が言う。

「なんか気味悪いから、やめておこうよ」

その意見に、他のみんなも賛成だった。

「うん、なんか気味悪い」

活発少年は諦めない。

「こんなに面白いもの、他にないって」

ああ、幽霊船を秘密基地にする。なんて素敵なんだろうと彼は思った。

他の男の子が言った。「あの船があるところまで、どうやって行くわけ？ 湖の真ん中にあるんよ」

活発少年もそれに気づいて困った。「そっか。確かに・・・」

「ねえ、もう帰った方が」とさっきの女の子が言う。

みんなそれに無言で従った。その言葉を待っていたんだ。

今来た道を引き返す。山を降りていく。でも皮膚に、セロハンテープは離れないでずうっと貼り付いていた。

首筋の後ろに、何かが付かず離れず、1ミリくらいの距離を置いてくっついてきているみたいだった。みんなその感覚ばかりが気になった。

活発な男の子も感じ始めていた。でも頭では思っていた。「あんなにいい場所、本当に他にないのに。あの幽霊船までたどり着けないなんて。すごくもったいなさすぎる」と。でもそれは本当に頭の中だけの話だった。

メンバーの一人が言った。「お前一人の秘密基地にすればいいんじゃないね」

「いや、あの、やっぱりやめておく。やっぱりたどり着けないし」

登るときにはみんなはしゃいで笑っていた。でも下りはそうじゃなかった。みんなが静かに、黙々と斜面を下っていた。なんとなく早足だった。ただ、首筋にまとわりつくものだけを感じていた。

霧がここまでかかり始めていた。少し下の方はかすんで見えた。

ここから家までの距離は、とてもとても遠いものを感じられた。

後ろを振り向く者は誰もいなかった。

その山に登って遊ぶことはもうなかった。

あれが最後だった。

山のそばの家に住んでいる友達も、山に出かけることは二度となかった。

活発な少年も、二度とあの場所に戻りたいとは思わなかった。

何年も経った。あ那时的メンバーは高校生になるときに、ばらばらに散ってしまった。電車の中でたまに遭遇することがあるくらいだった。

活発な少年だった彼は、「もうあのメンバーみんなが集まることはないんだろうな」と思い、少し寂しくなった。

そして秘密基地遊びをすることも、もうないんだろうな。部活もあるし、明日の英語の予習だっ  
てしなくてはいけない。

みんな大人になっていった。

## 床のからぶき

---

### 床のからぶき

小学校の掃除の時間に、雑巾がけという仕事があるのと思い出した。

汚れきった雑巾を使って、床を乾拭きするのだ。雑巾は表裏の区別なく使われている。雑巾に添える手が触れる面と、床に押し付けられる面に区別がない。

とにかく汚かった。

なぜあんなことをしたのだろう？

それは必ず手で行われなければならなかった。上履きで雑巾を踏んで、スケートするように床を拭いてはいけなかったのだ。もしそうすると、先生や先生の言いなりになっている児童は、俺に怒りの声や批判を容赦なく浴びせたものだった。彼らはそういう機会を決して逃すことはないのだ。いつも目を光らせ、待ち構えている。スケートしたほうが、体重を乗せて雑巾を床に押し付けることができるのだから、効率がいいと思うのだけれど。何より手が汚れない。

でもあそこでは非効率と無意味性と不快感こそが美德になっているらしかった。カエルみたいなポーズからスタートし、四つん這いになって床を拭くように強要されていた。そうとも、ただ床を拭くだけではいけないのだ。拭き方すら決められていた。正しい拭き方をしなくてはいけない。今となって考えれば、明らかにヒトの取る姿勢ではないと思う。当時はそんな雑巾がけが、掃除の時間中20分間、毎日繰り返されていた。それは屈辱だった。それは拷問だった。

あの汚い雑巾は、毎日毎日繰り返し使用され、決して洗われることがなかった。何年分もの化石みたいな汚れがしみこんでいた。布の繊維の隙間全てに汚れがこびりついて同化しているような雑巾が、平然と現役で使用されていた。それは綿ではなく汚れをかき集めて凝縮して作られたものようだった。実質的な成分は本当に汚れだったのかもしれない。世界中のあらゆる種類の汚れをコレクションし、かき集めて、雑巾の形にしたものだったのかもしれない。表も裏も、その間の層も、汚れがびっしりと詰め込まれていた。押し込まれていた。

汚い雑巾で汚い床を拭いていた。あるいは雑巾の汚れを床にこすり塗りたくりつけていた。何往復もしていた。惨めだった。意味のないことだった。そこまでの価値がみじんも見出せない徒労だった。徒労とわかっていても、しりと命令された。みんなは従っていた。言われた通りに従っていた。奴隷みたいに従っていた。そこには、人間の尊厳なんてものは存在しなかった。雑巾のほうがかちろん偉かった。

あの雑巾たちを洗濯機に放り込んで洗濯するというアイデアがなぜ先生たちに浮かばないのか俺にはわからなかった。それがわかるほど俺の知能は高くなかった。洗濯すれば、せめて表層のそのまた表層くらいはきれいになるかもしれなかった。そのようなささやかな清潔さもそこでは許されていなかった。それはもう掃除とはいえなかった。ただの嫌がらせだった。ただの儀式だった。毎日飽きもせず何度も繰り返されていた。

刑務所で、悪い看守が囚人に命令する。

「さあ、この木製コンテナを運べ！ 中にはまだ乾いていない臭え豚の糞が入ってる！ 糞の中



には豚の寄生虫がうじゃうじゃと入ってる！ 木製コンテナにエキスが滲み出るのが最高だろ！  
抱きかかえろ！ 貴様らの服にもエキスが染み渡り、肌にべっとりと貼り付くようにな！ そ  
して、この部屋のあちら側まで運んだら、またこっちに運んで戻って来い！ それを8回繰り返  
せ！ 終わったらまた8回！ 次もまた8回！ 俺がいいと言うまでやるんだ！ さあキリキ  
リ動け！ ぐずぐずするなこの糞ゴミ共どもが！ またこの俺様に歯を折られたいか！」

俺はそんな気分だった。

掃除の時間が始まると、もう逃げられないのだ。これから雑巾がけをしないといけないのだ。  
例外は許されない。命じられたら命に代えても実行しなくてはならないのだ。だってそうでし  
ょう、「みんなやってるのにどうして」。

これから20分それが延々と、延々と、延々と、延々と、延々と、延々と、延々と、延々と、延  
々と、延々と、延々と、延々と、延々と、延々と、延々と、ただただ繰り返されるのだ  
。何度も何度も汚れた雑巾で床を拭かなくてはならないのだ。20分間ずっと雑巾がけ、そう思  
うと眼球がぐるりと上を向いた。20分後は、ずっと先のことに思えた。

私は、家族連れの観光客溢れる、駅前の広場へと歩いていった。

でも駅の様子はいつもと多少違っていた。そこで私はああこれは映画なんだなと理解した。これは駅前広場を舞台とした映画なのだ。私が歩いているこの場所は、きっと大きなセットなのだ。

例えば、少林寺を舞台にしたカンフー映画だって、本物の少林寺をセットに撮るわけにいかないこともあるだろう。そういうときには本物に似せたセットの上で撮影をする。それと似たように、これは駅とその広場に似せて作られたセットなのだろうと私は思った。

これが映画である証拠が速やかに現れた。広場の岩やら、周りのバスやら車やらが、ツイスターに巻き込まれた牛のように、広場を中心に飛びまわり始めたのである。まるで洗濯機の中のような。さらに岩やバスは、大根のようにスパスパと、きれいに8つくらいに切れた。切られた切片、といってもそれぞれが大きいので切片というイメージとは程遠いが、切片の断面は非常に美しかった。本当にすっぱりと、真空の刃で切ったかのごとくであった。この巨大な切片が洗濯もののように広場を中心に回転して飛んでいるのだから、ますます映画である可能性は濃厚であろう。これがCGでないはずがない。私は、きっとこのシーンはこの映画の見せ場なのだろうと思った。

そのときさらなる異変が襲ってくる。足場を構成していた地面さえもが、正四角柱となって浮き上がってきた。底面の辺の長さは2 mくらいであろうか。縦に長い。四角にこれまたすっぱりと切り分けられ、ランダムにゆっくりと地面を離れていくのだ。大きな四角い井戸がくりぬかれていくようだ。広場にいた観光客たちは、自分の乗っている正方形が浮き上がってくるのに気づくと、隣のまだ浮き上がっていない正方形に飛び移るのだった。正四角柱が地面から抜けていく様子は、永久歯が抜けていく様子に似ていた。

さて正四角柱が抜けたあとの場所には、なんと水が満たされていたのだった。観光客たちは残った足場に集められた。足場は島のようにあり、もちろん広場が崩壊する前よりも面積はずっと少ないので、島の上の人口密度は高くなっていった。岩やバスの切片の竜巻は、それ自体の遠心力で遠くへ散ってしまったらしく、抜けた正四角柱は上空へとゆっくり上昇していった。

水の色は、少しだけ緑色の入った青で、きれいな水であるらしかった。その証拠にサメたちが泳いでいる。ホオジロザメであった。

ホオジロサメはいきおいをつけて泳ぎ、頭と歯を島に上陸させ、島に避難している観光客たちを水中にさらっていった。サメの口の中に、人間一人が余裕で収まり、そしてサメは水中へと帰っていった。食べられた者を、残りの家族が呼んだ。「おかあさん！」とか「おとうさん！」とか、あるいはそれぞれの子どもを呼ぶ声は広場中にあった。あるいは、例えば家族3人が一口の中に収まることもあった。そういうときには、誰も家族が残らず、名前を呼ぶ者もいなかった。せっかく家族で観光にやってきたのに、サメに食べられるとはとんだ災難である。

そのとき水中に黒い影が一つ。速い。ホオジロザメよりも小型のその影は、頭から二つに分裂した。そこで私は、こいつはあのバスや岩のような性質を持っているのかもしれないと思った。

二つに分裂した黒いものも、それぞれがサメのような容貌をしていた。ホオジロザメはもちろん白い。それとは対照的であった。ただ、この2匹の黒いサメのような泳体からは、生き物らしさが感じられなかった。ヒレを持ち魚のように泳ぐのだが、どうも生き物のフリをした何かのようであった。

黒い泳体は、自身の身体に刃を持っているらしく、ホオジロザメをすれ違いざまに斬った。観光客たちは、人類の味方が現れたのかと歓喜した。私も、黒い泳体を味方だと思った。黒い泳体は、ホオジロザメを尾のほうから、すぱりすぱりと均等な間隔で断っていった。巨大なホオジロザメは、尾の方を斬られたときには痛みに怒り狂い身体をよじったが、それも3断ちくらい斬られていたときには、もうよじるための尾は消失していた。斬られた尾は丸太のように水中を漂った。黒い泳体による斬撃が腹まで達したときには、もうホオジロザメは動けなくなっていた。泳体は一匹のホオジロザメを頭まできれいに断ちつくした。8等分くらいにされたホオジロザメの身体は、やはり丸太のようにぷかぷかと水中を漂っていた。最初は尾から頭へ順番に直線に浮かんでいた身は、波に従って制御をなくし、順番はばらばらに、各身は自由に浮かんだり沈んだりしていった。

黒い泳体によるホオジロザメの解体は何しろ早く、次々と仕留めていった。ホオジロザメのほうは血の匂いに誘われて集まってくるらしく、ここ付近の個体数は一向に減らなかった。観光客も相変わらず食べられ続けていた。黒い泳体の活躍を見ようと島から頭を出した人がばくんと食べられたのを私は見た。

ホオジロザメの主とも思われるほどの超巨大な個体が、駅本館に避難していた人々を襲っていた。頭を陸に上げるストライクの射程距離は長かった。黒い泳体は2体ばかりでこの主を血祭りにあげた。この主は何しろ巨大で、泳体の刃でも先ほどのように完全に断ち斬ることができならしく、体表面を浅く何度も切り込むようにして血祭りにあげた。ぱっくりと割れた傷口から水が入り込み、主は動かなくなった。

黒い泳体は人類の味方のようにみなされたが、どうやら根っからの味方ではなかったらしい。もし本当に味方ならば、各ホオジロザメの急所を狙って攻撃し、最短時間で最大限のホオジロザメを殺し、最大限の観光客を救うはずである。しかしそうではなかった。黒い泳体は、もし殺すことだけが目的なら頭や首や腹を一刀両断すればよいところを、わざわざ遠回りして殺していた。まるで殺し方の美しさ、出来上がったホオジロザメの死体の美しさに酔っているようであった。人類は、たまたま彼らの獲物のホオジロザメの獲物だっただけのようだった。

黒い泳体は、ホオジロザメの体表面にらせん状に斬り傷をつけてオブジェのようにしたり、ヒレを斬って泳げなくさせたものをしばらく喘がせ、そのあとで喉に一撃を加えてとどめをさしたりした。私はそのとき、ヒレを斬られて動けなくなっているサメはもう観光客にとって脅威ではないのだからとりあえず放って置いて、他のターゲットを効率よく狩って欲しいと思ったものだった。しかし黒い泳体は効率などまるで考えていないようで、様々な殺し方を試していた。駅前の水中には、ヒレを失ったサメや、尾を失ったサメなどが泳いでいた。また、実に様々な方法で殺された、実に様々なサメの死体が漂っていた。

黒い泳体はあるとき、一匹のホオジロザメの正中線を一刀両断した。縦断面が美しく現れた。

胃袋から、人体がまるごと浮上してきた。人体は、表面がすでに消化されていた。全体に黄色っぽかった。特に私の印象に残ったのはその唇で、ぼろぼろの海草のようになって、間に前歯が見えていたことである。

黒い泳体はこの殺し方を覚えたらしく、胃袋の中の人体をサメと一緒に斬ってしまわないで、人の形を保存して斬る殺し方を始めた。

するとサメが殺されるに従って、人体が浮上して来る。消化の程度はそれぞれ異なった。溺死したばかりのもあれば、肉が全てなくなりバラバラの骨にまで消化されたものもあった。

浮上するにつれて、それぞれの人体を指差し、島の上で生存していた家族は、「あ！ あれはお父さんだ！」とか「あれはお母さんだ！」、と叫んだり、または「あれは〇〇だ！」と子どもの名前を叫んだ。誰からも指名されない人体もあった。どこかに自分の家族が浮上してこないかと思ひ探している家族がいる。

今、水は、黄色く濁っていた。きっと血が薄まり、何かの具合で赤ではなくて黄色になったのだろう。

島の上の観光客達は、水に手を入れてぱしゃぱしゃやって、浮き上がってきた人体を自分の島に引き寄せ、引き上げていった。自分の家族を引き上げている者もいるし、誰のかわからない人体をわけがわからないまま引き上げた者もいる。

自分の家族の人体を自分のいる島の遠くに見つけた家族は、家族の人体が浮かんでいる近くの島の人に大声でお願いするのだった。「すみませーん、そこに浮かんでいるのは、私の夫なんです。引き上げておいてくださいますかー！？」というように。

引き上げようとする手に噛み付くサメはもういなかった。

観光客達はそれでも、もしかしたら噛み付かれるかもしれないと恐怖しながら引き上げているようにみえた。

あらかたの、人の形をした人体が引き上げられると、ばらばらになった骨が水面に浮かんでいるのが目立った。ごぼごぼと、黄色い水中を、さまざまな形の骨が浮上してきた。もはや、水面の面積の半分は骨であった。人間には215本だかの骨があることを私は思い出した。

すると一部の観光客達は、各々の島の近くに漂っている骨を水面から拾い上げて、いい形をしたものを集めだした。拾い集める者は、子どもが多かった。子どもはそういうのを拾って集めるのが大好きなのだ。宝石でも見定めるようであった。

いい形でないのもあるらしくて、一度手にとるけれど捨てる人も多かった。ちょうど、河原で水切り投石をするのに適していそうな石を捜し、拾ったり捨てたりすることを繰り返す様子に似ていた。

私は、ああ、もしかしてこの水を黄色くした血の中には、血液で感染する病気があるかもしれないな、と思った。それなのに、骨を拾っている人は感染するのが怖くないのだろうか？ 人間の手には気付かないほどの小さな傷があるかもしれない。感染の可能性を考慮していないのか、それともいい形の骨を集めるのが大切なのか。とにかく、私には感染が大変に恐ろしく思われた。とても私には、この黄色い水の中に手を突っ込んで骨を集めるなんていう真似はできないと思った。

けへけへ

---

路上を、汚くぼろぼろの服を着た婆さんがうろうろしている。

「けへーっ へっへっへっへっ・・・」

見るから怪しい。霧のスタンドとか持っていそうだ。

通りすがりの、スーツを着た、若いサラリーマン風の男に声をかける。

「けへけへえ！ おいあんた！ 世の中の諸悪の根源は何だと思うね？ え？ なんだと思うね？」

男は驚いたが、ここで自分の意見を発表しなければならない使命感のようなものを感じた。

「諸悪の根源は、地球温暖化です！ それがだめだから、世の中はこうしてだめになっていくんです！ 日本の政治家が外交には弱気なのも地球温暖化のせい！ 子どもの学力低下も地球温暖化のせい！ 地球温暖化は、自分のことだけを考えて、私達のことなんか微塵も考えちゃいないんだ！」

「けへーっ へっへっへっ がほっ がほっ そうかい、そうかい・・・地球温暖化が諸悪の根源だと・・・ あんたは思うわけかい、けへーっへっへっへ・・・」

婆さんはサラリーマンにもう興味を失い、他の男に話しかける。こちらもスーツを着ている。だが初老で、頭は薄く、人生に疲れているような男だ。

「そこのあんた！ そう、あんただよ！ 世の中の諸悪の根源はなんだと思うね？ 何だと思うね？」

初老男はうつむいて、深刻そうな顔をして答えた。

「若者。若者ですよ。テレビのニュースも見なければ新聞も読まない、今だけ楽しければいいじゃんとして遊んでばかりいる。家にひきこもったりニートでいたり、働いてもフリーターだ。選挙にも行かない。携帯電話ばかりいじっている。わけのわからん音楽を聴く。ジャラジャラとした金属を体中につけて、髪は染めるし、ピアスは開ける。すぐにキレて、平気で人を殺す。娘どもは家出して、金の為に援助交際する。若者どもの頭はサル並みだ。若者さえいなければ、世の中もっと過ごしやすくなるというのに！」

「けへへえ！ そうかい、そおうかい、あんたは若者が諸悪の根源だと思っている・・・ よおおくわかったよ、けへへへへ・・・」

次は、頭にパーマを、顔には度のきつい眼鏡をかけたおばさんに話しかける。その眼はぎらついている。

「あんた！ この世の諸悪の根源はなんだと思うね？」

「あたしかい？ ふん、そんなの決まってるじゃないか！ アラブ諸国だよ！ あいつらが原油の値段を引き上げるから、こうして私らが苦勞してるんじゃないか！ 自分たちだけ儲けやがって、ふん！ テロはやるし暴動は起こすしで、いいことなんかひとつもしないじゃないか！ 野蛮だよ、野蛮！ アメリカは一体何をしてるんだい！ 核ミサイルいっぱい持ってるんだから、あのへんにぶち込んでみーんなぶっ殺しちゃえばいいってんだよ！ 全く！」

「ほーほー・・・ アラブ諸国ねえ！ けへけへっ なるほどねえ、けへっけへっ！」

なんと婆さんは、私に話しかけてきた。

「あんた！ 諸悪の根源はなんだと思うね？」

私は答えた。

「アル☆アルプラーゾ☆トッフィソタゾラるむッシュ☆プロチ☆見るな蟻蛙ピプラゾー☆ハロペリ鰻鯛鮫鯨ちゃん」

「けひゃあ！ アル☆アルプラーゾ☆トッフィソタゾラるむッシュ☆プロチ☆見るな蟻蛙ピプラゾー☆ハロペリ鰻鯛鮫鯨ちゃんかい、そうかい、そうかい、けへけへけへけけ」

い、言われた！

私はひとりで、敗北感を味わった。

## 空気読め

---

「ここによオーッ 手榴弾ならあるんだけどよオーッ！ 今からこれで集団自決しようぜエ、みんなさァー」

「そうだなもう死ぬしかねエゼ。死のう死のう」

「ばっ 馬鹿野郎っ ここで待機の命令があっただろうが！」

「待機ってことはさァーッ もう俺らの負けじゃね？ 事実上？」

「てかてめ一、口挟んできてんじゃねえよ、今さ一、せっかく死のう死のうってことで場が盛り上がってんのにさ、どうしてそういう冷めること言うわけ？ 空気読めよな！」

「そうだよ、全くだよ、空気読め。友達いなくなるぜ」

「自決するっつー空気読め」

「空気読め！ 空気読め！」

「誰が自決なんかするか！ 俺には妻も子もいるんだよッ！ 生きて帰るって約束したんだ！」

「うっぜーうぜー まじうぜー 約束とかうぜーし」

「妻とかまじきめえ！ 変態！ 非国民！」

「腰抜け！」

「てかてめ一、まじ最初に死ぬ。まじ死ぬ」

「お前が最初に死ぬっていう空気になったから、空気読め！」

「ぶっ殺せ！」

「銃剣を刺せ！」

「がっ！！！」

「ひやはは 死ぬ死ぬ！」

「空気読まなかったてめえが悪りいんだぜ！ 償いやがれ！」

「おいっ てめっ 俺の方に血を吹き出すんじゃねえ！」

「あーあ KYも殺したことだし、じゃあ死ぬか」

「そーだな、ぶっ飛ぼうぜ！」

「1分後には俺らみんな肉片だなァ！」

場は最高に盛り上がっている。

「はいみなさんピンはつかみましたかー？」

「はい」

「それじゃみんなで一斉に抜いて死にましよう！ はい、あ、3、2、1と！」

「はい、上田ですー」

「・・・充助だけど」

「なんだよ充助か。どうした？」

「なあ父さん、俺って協調性ないのかなあ」

「なんでそう思うんだ？」

「今日俺の友達とか仲間とか、そういう人達に言われたんだ・・・すごくいい人たちなんだけど・・・」

「まあ社会の中で生きていくにはな、周りの人と協調してやっていくってことも必要だからな。そうやってうまくやっていくというか。自分勝手なことやってると人生うまくいかないからな。自分の欲求を抑えるべきときには抑えないと」

「父さんもそう思う？」

「そう思うよ。誰だってそう思うよ」

「そうか、わかった。じゃあ・・・ そうしてみる。もっと周りの人と協調するようにするよ」

「よかった。それなら父さんも安心だ。それで大丈夫？」

「うん、もう大丈夫」

「それじゃあな、おやすみ」

「ありがとう、おやすみ」

一次の日一 友達とか仲間と会う。

仲間A「上田君、来てくれたか」

上田「はい、やっぱり考え直したんです。僕は自分勝手でした」

仲間B「それでいいんだよ上田君。私たちと一緒にいれば間違いはないからね」

仲間C「おい、そ、そろそろ、き、教祖様がお話しになるぞ」

教祖登場。歓声が集会ホールに湧き上がる。

教祖「えー、・・・モゴモゴ・・・ えーと、・・・モゴモゴ・・・」

明日はついに、モグモグ・・・、地下鉄にダイオキシンを撒き散らす日です！」

ホールいっぱいの仲間たち、さらに盛り上がる。

教祖「しかしですね、モゴモゴ・・・、名誉ある実行者になるはずだった、えーと、ぱうっちだっけ？ 名前忘れちゃったけれども・・・モゴモゴ・・・、まあいいや、ぱうっちということにしよう・・・ その人が行方不明になってしまいました！ 連絡もつきません！」

仲間たち「なんだって！」「あいつめ！」「裏切り者だ！」「自分もダイオキシンを吸うことになるから逃げたんだ！」

仲間A「ぱうっち、なんと愚か者よ・・・」

仲間B「見つけだして生贄にするべきだねこれは」

仲間C「そ、そうだ、ほ、骨まで粉にしてやる！」



上田「全くその通りですね！」空気読んだ！

教祖「えーとね、モゴモゴ・・・ まあぱうっちはあとで見つけ出して殺してね、地獄に落ちるようお祈りするからね、みんな安心してね。モゴモゴ・・・それでね、明日の実行者がね、いなくなっちゃったから、ここはひとつ、若い新入りの誰かがね、はい僕やりますという風だね、空気を読んでね、志願してくれるとね、モゴモゴ・・・ ありがたいんだけども。名誉ある実行者はね、あの、天国とね、50億年後の来世で、幸福で栄光あってみんなに尊敬される人物に生まれ変わって周りの人とうまくやることができるとね、私の書いた教典にもあることだし」

上田「はい僕やります！」空気読んだ！

教祖「あ、いた。誰か知らんけど。よかった。じゃあ決定」

仲間A「いいぞ上田君！ 協調性がある！」

仲間B「空気読んでるね！」

仲間C「き、君は、め、名誉ある、じ、実行者になったのだ！」

父さん、僕は天国でも来世でも、周りの人とうまくやっていけそうです。

## プロのプロデューサーからの伝達

---

次回の右脳を鍛えるクイズ番組では、東大生を出演させようと思う。むろん視聴者は、東大生が番組内で間違い、大恥をかくことを期待している。視聴率のためには、もちろんこの期待に応えなければならない。

それにより、視聴者が東大生へ抱くイメージが悪くなっても、それは私達の責任ではない。

だめな東大生のイメージといえば、勉強ばかりしか能がなく、親の期待に応えて勉強し、入学したとたんに生きる目標を失い、自分でものを考える能力はまるでなく、何かに感動することもできず、そのくせプライドだけは高く、楽しく遊ぶ方法を知らず、精神的には幼稚なままテストの点数だけが大人になったというタイプだ。

むろん、東大生の多くはそうではない。彼らは実に聡明で、活力に溢れ、人を思いやる気持ちがあり、精神力も強く、友達も多くいる。

しかし、我々はプロの番組スタッフだ。視聴者の期待に応えなければならない。よって、私は君に頼みたいと思う、だめなイメージを体現したような東大生を見つけ、つれてくることを。

東大生でない人間を、東大生だと偽るのは、倫理的によくない。従って、本物の東大生の中から探してくること。

## 反抗期のビデオ

---

家庭科の授業。ビデオを見る。

回転寿司のシーン。両親と、小6の男の子と、小2の女の子。

両親は割り箸を割った。子どもにも割り箸を薦める。女の子はとったが、男の子は「僕はいよ」と言う。

男の子「手でつかんで食べたい。そのほうが粋なんだ！ さっき、手で食べるためにちゃんと手を洗ってきたんだ」

母親「ちゃんと箸で食べなさい。そのために割り箸がここに置いてあるんだから」

男の子「割り箸を使うかどうかは客の自由だよ」

父親「どうして箸では食べられないんだ？ お父さんもお母さんも、ほらチエだって箸を使ってるじゃないか」

男の子「でも僕は手で食べたい。粋でかっこいい。そのほうがきっと美味しいんだ」

母親、大声で「どうしてそんなわがまま言うの！ みんな箸で食べてるでしょ！！」

女の子は両親の剣幕に驚き口を開け沈黙している。

父親「そうだぞ、お母さんの言うことをちゃんと聞きなさい。どうして聞かないんだ？ わがまま言わないでちゃんと箸で食べ」

男の子「今日は手で食べようって楽しみにして来たのに！ 手で食べたいよ！」

ナレーション「親の言うことに、理由なく反発する。これが、反抗期です」

シーンは、回転寿司を食べ終わった後の、駐車場へと移る。

男の子はしょぼんとしている。両親は不機嫌そうである。女の子はどうしていいかわからない雰囲気である。

母親「あー せえっかく回転寿司に来たのに、ぜえんぶヨシタカのせいでつまんなくなっちゃった！

あーああーつまんなかった！！」

父親「そうだぞ、ヨシタカのせいで、せっかくの寿司もゲロまずだったな」

女の子チエは、両親の味方に付く。「お兄ちゃん、どうして箸で食べなかったの」

母親「ヨシタカのこととは二度と回転寿司には連れてこない！ 二度と連れてこないからね！ ヨシタカがいるとせっかく楽しいはずの回転寿司が糞つんっつまんなくなるから！ 家で留守番してカップ麺でも食ってる！ あーああー お前なんか生まなきゃよかった！ いいんだからね！

今からでも施設に預けたっていいんだからね！」

ナレーション「反抗期には、毅然とした態度で臨みましょう」

「オルモスト 11時、オルレディ 11時だ」と俺は言った。

「どうして英語を混ぜるの？」と彼女は言った。

彼女といっても、恋人ってわけじゃない。女の子を指す代名詞として、彼女という言葉を使ったんだ。彼女は言う。

「意味もないのに英語を混ぜるのとか嫌いだよ。英語を混ぜる意味がない。私達は日本人なんだから、日本語で喋ればいいじゃない。日本語で喋るべきだよ。」

「まあ一理ある。でも俺の方はね、なんとかするべき、と決めるのが嫌いなんだ。通じるのなら、英語だって古代ペルシャ語だっていいと思ってる。意味のことをいうなら、日本語で喋る意味だってない。だろ？」

「ふうん...」

彼女は数日後に、拳銃で頭を撃って自殺してしまった。もしかしたら俺の話聞いて、生きることの意味を感じなくなったのかもしれない。そう思うと、責任を少しは感じる。どうして日本なのに、拳銃が手に入ったのだろう。切腹じゃなかった。俺が自殺するなら、何かメッセージを残したいと思う。わざわざ拳銃を使うあたりに、俺に向けてのメッセージが入っているのかもしれない。でもね、俺には通じていないぜ。

## キスしようとしている落下中の二人

---

二人はキスしようとしている。でも二人は首というか後頭部というか、その辺をばっさりを切られていた。だからその辺が欠けている。

二人は装飾用のナイフを頭につけている。トサカみたいに。きっとこのファッションが流行りなのだろう。

二人とも腕が途中までしかない。肩と肘の間あたりまでである。

そして二人とも妊娠している。

今気づいたことだが、この二人は落下しているね。どこか高いところから落下中なんだ。それでも二人はキスしようとしている。

お互いの唇をくっつけ合おうと頑張っているんだ。

## グロテスクモンスターズ

---

さまざまなタイプのモンスターが、魔王の塔に向かっていているように見えました。正義のモンスターと悪のモンスターが混ざっていました。正義のモンスターは魔王を倒すために、悪のモンスターは魔王を守るために、それぞれ魔王の塔に向かっていました。モンスターは可愛いものではなく、人間の眼からみるとどれもグロテスクでした。直接肉弾攻撃するのが得意なモンスターも、魔法で攻撃するのが得意なモンスターもいました。モンスターは種類ごとに、その能力がとても違ってしました。

魔王は、かまってもらえるのが嬉しそうでした。

もう一度見ると、今度はモンスターではなく、それはサラリーマンに見えました。やれやれ、という気持ちで会社に向かっていたのでした。

## 殻のある生き物

---

これは殻のある生き物だね。海の底に住んでいるんだ。

分類上は、軟体動物腕足類だと思う。

体の半分を占める大きな口吻を伸ばして獲物を捕食する。口吻には色鮮やかなひだひだがついていて、このひだひだの美しさでオスはメスに求愛する。

と思ったら、これはやっぱり武器だね。

手甲みたいに装備するんだ。

全部金属で出来ている。

殻が手甲部分で、刃物による攻撃をガードする。

そして先に伸びている口吻みたいな部分、これは相手に突き刺す針とか刃とか槍とか、そういう部分だ。

ひだひだに見えていた部分は、相手の肉を深くえぐるためのトゲトゲだ。

両手に装備するといいと思う。

## 不適應なサルの顔

---

サルの顔だ。オス。発情期になるとね、顔のあちこちが大きく大きく膨らむの。大きく膨らんでる方が、メスに求愛するときに有利なの。

でもこのサルは、ちょっと大きく膨らみすぎですね。大きく膨らみすぎて、異常なレベルに達している。

そういうわけで、彼の求愛は全然成功しませんでした。

大きく膨らみすぎて、不適應になりました。



## 金が十分に貯まった

---

金が十分に貯まった。今や、世界の97%の富を私が所有しているのだ。そのせいで、世界経済は破綻し、人々は失業し、路頭に迷い、餓死し、自殺している。

「どうしようか？」と私は尋ねた。

妻は答えた。「ユーラシア大陸を買って、ユーラシア大陸をふんだんに使った豪邸に住みましょう」

悪くない考えだった。きっと世界遺産になる、大きな大きな館ができる。

しかし、建築するには長い時間が必要だった。多数の建築士の計算では、ユーラシア全土を覆う豪邸を建設するには、2000年はかかるということだった。設計するのも大変だ。しかし、2000年かかっても構わない。私はお金を使いたいのだ。建築を依頼した。

建築はそこそこ順調に進んでいったけれど、私は結局のところ、日本にある二階建ての家に住み続けていた。

「内装を豪華にしましょうよ」と妻が言った。

200兆円の、誰か有名なデザイナーの作ったシャンデリアを玄関に飾った。私の知る限りではもっとも高いシャンデリアだった。でもデザインは私の趣味ではなかった。

ちっとも面白くないと私は思った。

私が求めたのはこんなものだったのか？

貧乏だったころを思い返した。

人々は私を成功者だと思っているかもしれない。

きっとそうなのだろう。お腹いっぱいにご飯が食べられる地点で、すでに成功者だ。

こんなものが私の望んだものだったのか？

繰り返す。ちっとも面白くないと私は思った。

妻も、内心では面白くないと思っていることが、私にははっきりとわかった。

外で雨が猛烈に降り、雷が鳴った。

私は雷が怖かった。我慢できないほど猛烈に切実に怖かった。

私は妻とセックスをした。ベッドは普通のベッドだった。

結局のところ、私はベッドの上で妻と仲良くふざけあうことが一番好きだった。

## 地球滅亡

---

### 地球滅亡

隕石「いやー・・・　そういわれてもさあ、俺の方だって好きでぶつかるわけじゃないんだよね、ほんと。申し訳ないよ、ほんと。たまたま軌道ずれちゃってさ、仕方なくなんだよ。あんまりうらまないで欲しいね。いや、俺一個の犠牲でさ、この星のみんなが助かるってんなら、俺は砕けてもいいよ。核とか持ってんだろ？　こういうときのために使えよな。地球に使わず隕石に使え、核は。

あー　あー　やっべーって　やっべーって　ほんとまじぶつかるって

ぎゃああああああ　痛ってえええええええ！　おごえご！」

隕石は死んでしまった。

## 地球滅亡2

---

### 地球滅亡2

ある日、NASAは、隕石が軌道を外れて、地球に飛来してくるのを発見した。

職員「パニックになるから秘密にしておこうね」

「うんそうしようね」

地球は滅亡してしまった。

### 地球滅亡3

ある日、NASAは隕石が軌道を外れて、地球に飛来してくるのを発見した。

職員「大変だ！ 隕石が地球に向かってるんだ！ ただちに対策チームを結成してくれ！」

せーじか「は？ あいつ何言ってんだ？」

「ただの馬鹿だろ」

「映画と現実の区別もつかねーのか」

「頭狂ってるんだろ」

「病院に閉じ込めとけよ」

「そんなところに税金使ったら国民からの支持が得られん」

「うちらは経済対策で忙しいっつーの」

「あとテロとの戦いも終わってねーし」

「そうそう、今まで隕石で死んだ人よりテロで死んだ人のほうが多いんだからな

？

こんな簡単な計算すらできんのか、NASAの職員は。国家の恥だね」

「次の選挙どーしよ」

こうして地球は滅亡してしまった。

ごめん嘘です。滅亡していません。

人類は滅亡したけど。

隕石衝突を生きのびた生物達がその後進化して、長い時間をかけて失われたニッチへ進出し、また地球は豊かで多様な生態系を築いたのでした。

3億年後。

人類の次に誕生した知的生命体

「すごいことがわかった。どうやら3億年ほど前、我々より先に高度な知性と文明を持った生物がいたらしい。背骨と大きな頭蓋骨と直立二足歩行が特徴だ。しかし、隕石が衝突したときに滅んでしまったようだ」

「隕石からこの星を守るほどの科学力も兵器も持っていたようなんだが・・・」

「どうして使わなかったんでしょうね」

この知的生命体にとって、生物学史上最大の人気を持つ謎は学会で数え切れないほど議論され続けた。

しかしついぞ正しい学説を打ち出す者はいなかった。

正解を出す前にこの知的生命体もいろいろあって絶滅してしまった。

それでも地球は豊かで多様な生態系を持ち、その日も生物たちは今日も自然の中で生きたり死

んだりしていた。

## もう寝たほうがいい

---

「もう寝たほうがいい」とお父さんに言われてベッドに入った。

でも、鼓動が早くなる。

何か起きそうな予感がするのだ。

夜には不思議な魅力がある。

夜だ。

ベッドから起きて窓の外を見た。

クリスマスでもないけれど、サンタ的な誰かがやってきそうな気持ちがある。

何か願い事をする。

ベッドに戻る。

鼓動が少し静まってきた。

眼を開けると天上が見える。

眠気がゆっくりと心を侵食する。

眠るんだ。

明日も学校がある。

## よくある光景そのたびに

---

私は耳鼻科の待合室に座っていた。耳鼻科の隣は小児科だ。つまり私は小児科の待合室のすぐ隣にいた。

小児科の待合室から子どもの泣き声が聞こえた。それを泣き止ませようとする母親の、もっと大きな声が直後に聞こえた。

「あんたねっ！　ここは病院なんだよっ！　静かにしなくちゃいけないだよっ！　いったい誰のためにいっそがしいなか連れてきてやってると思ってんだいっ！　もうつれてこないよっ！」

「うばああああああああっ　くううっ　うヴああああああああ」

「どうしていうこときかないのっ！　うるさいよっ！　だまれっ！」

母親は自らの子の頭を叩いた。結構強く。ばしっ。そう、大切な子どもの頭を、なんと、叩いたのである……。

「ううっ　ぎぎゃああああああああっっ　あ　あ　ああああ　うわああああああああああん」

当然、子どもはもっと大きな声で泣く事になった。

「ああうるさい！　ああやだおおやだ！　もういいかげんにしてよ！　このばか！」

私は、心の中で強い怒りを感じていた。泣いている子どもを叩いたらもっと泣くのは当たり前じゃないか。それによってもっと泣いたらもっと叱るなんて。しかも大切な、急成長中の脳が収められている頭を叩くなんて。

貴様っ　それでも母親か！

そして私は名前を呼ばれたので、耳鼻科へ入っていった。

## 有罪中学生カップル

---

眠い。だけと思いついた文章を二時間半ぶっ続けで書いてしまった！

### 有罪中学生カップル

あるところに、少女漫画のアフターストーリーのようにとても仲の良い中学3年生のカップルがいました。

ピルを使って避妊をしていました。

しかし、医者への指導が手抜きであったために、彼女は妊娠しました。

中学生二人の家族たちは、二人の強い愛情と誠実さを知っていました。だから最初は驚きましたが反対なんかはしませんでした。自分たちで人生を拓きなさい、私たちは全力で応援するから、と言いました。

しかし、18歳未満の相手と性行為としたのが違法ということで、二人は裁判にかけられました。

医者が手抜きであったことは、二人にも医者自身にも自覚されなかったため、誰にも気づかれませんでした。

裁判官「君は、18歳未満で異性に対して恋愛なんていう感情を持ち、性欲を持ち、性行為に及んだということを恥ずかしく情けなくかたじけなく思って死にたいとか思わないくらいおこがましい人間なのかね？」

彼女「そうですね」

彼氏「ええ、全然恥ずかしくありません」

裁判官「生まれてくる子どもが可哀そうじゃないのかね」

彼女「思いません。思いっきり愛情をこめて育てます。もういろいろ名前考えてるくらいです。読めない珍名ではないですよ」

彼氏「もう卒業して働けます。彼女と子どもと、将来を築けると思うととても嬉しいです。きちんと籍を入れられるようになるのが待ち遠しいです」

裁判官「ふん、どうせ下層な暮らししかできんよ」

彼氏「まあそうかもしれません。このご時世ですから。しかし、もしです、私たちみたいな二人に本当に経済的余裕がなく、さらに家族の応援も受けられなくて、育児能力がないとしても、国がきちんと育ててくれます。そういうセーフティネットがこの国にはあるのです。子どもが飢え死にしたりはしません、とても感謝しています」

裁判官「はっ！ 産んでおきながら国に面倒見てもらおうってのか？ ムシがよすぎるんじゃないの？ その金は誰が払ってると思ってんだよ、国民が税金として苦しい中納めてるんだぞ、わかってんのかこのゆとり厨房！」

彼女「わかっています。しかし、世の中には生まれた子どもをすぐに殺してしまったり、虐待してしまう例が非常に多くありますよね。中絶に反対しているわけではありません、難しい問題で



すし、人それぞれの事情があります。正直私も、何度も何度も悩みました。私の言っているのは産んでからのことです、あの親たちは、なぜ子どもを公的機関に預けなかったのでしょうか？  
そういう知識や発想がなかったのかもしれませんが。そういう情報が行き渡っていないことも非常に悪いことです。しかしあるいは、公的機関に預けることが情けないとか恥ずかしいとか思っていたのかもしれませんが。そういう社会的風潮が、私は嫌いです。自らに育児能力がないと自覚したら、堂々と公的機関に預けてよいのです。それが子どもの人権です。税金を納めている国民も、さすがに全員ではないと思いますが大半の人は、子どもの命のために税金が使われるのならばそれは正しいと思うはずです。」

裁判官「がたがたぴーぴーうっせ。まあいいや、てめえらはとにかく18歳未満なのにファックしたから有罪なんだよ！ そんな法律知らなかったじゃすまねえぜ。知らなかったで済む社会だったらなんでもまかり通っちゃうからな。この、社会という共同体に所属するからには、法律くらい全部知っておかなきゃならないんだよ！日本は法治国家だからな、発展途上国とは違うんだよ！ひらがな覚える前に法学を専攻しとけてんだ！じゃないと、いつどんな法律に触れて犯罪者になってるかわからんからな！ 貴様らのガキだが、犯罪者の子どもが親なしで育つんだ、てめえらの思い通りだな！いじめられていじめられて、そのうちいじめる側になるんだ！その子どももきつと犯罪者だぜ！当然だ、その汚えチンコがハメられた汚えマンコから出てくるガキ！キモくてバカで存在するだけ邪魔なガキになる運命確定だァ！うっげ、想像しただけで吐き気がしてきた。この裁判所に来るかもな、親子二代揃って常連かよ！いじめる側になる前に自殺してくれたほうが楽だな、税金もかからんし」

彼氏「私が来年から働いて養って育てていきたいのです」

裁判官「人の話きいてんのかこのボケクズゴミ野郎！てめえらは有罪だっつってんだよ！どうせさ、愛とか言っても、誰でもいいからやりたかったんだろ？ 性の低年齢化ってやつだな！好奇心とかですぐやりやがって、このレイプ魔とサセ子め！」

彼女「傍聴席のみなさん、聴いてください。この判決は大きく世間と世論を揺るがすでしょう。私たちが有罪になることで、人間やその本質に関わる性というものを法律なんかで完全に制御・支配できると思い込んでいる人、付和雷同主義者達、禁欲原理主義の人達は、諸手を挙げてこの有罪判決を歓迎することでしょう。私はそういう人たちの頭がいいとは思いません。決して思いません。しかし、私がいいなと思うような人間、つまりは人間やその性というものの本質や、生命というものを理解しようとする人や、付和雷同ではなくて自分で考える能力を持つ人たちは、この判決を批判することでしょう。そのことにより、世間の潮流が変わり、無駄に殺されたり虐待される子どもが減るのなら、私たちは有罪の判決を受けても構いません」

裁判官「子ども育てられないからって施設に預けることを称賛するような、そんな無責任な潮流ができてたまるか！自分で責任とって虐待するなり屠殺しとけてんだ！」

彼氏は思い切り机を叩き、自分の喉が痛くなる大声で怒鳴った。

「何てことを言うんだっ！！！！お前はそれでも人間かっ！！！！」

法廷にいた全員がびくっとした。耳が痛くなるほどであった。彼氏は自分の怒りと大声に驚いた。裁判官も驚き、身をすくめたが、にやりと笑って反論した。

裁判官「おい、今の聞いたかい？　ここじゃ静粛にしなきゃなんねえのによ、感情むき出しでマジになって大声出しちゃって、ほんと身体だけでかくなって中身はガキんちょのまんまだな。すぐキレて誰か殺す若者の典型。しかもしかも、この年上目上の俺に向かってさア、敬語も使えない！今の子どもは本当にだめだなァァ。まだ給料も稼いでない養われの身なのに！お前とか言っちゃってさ、うふふふ、反抗期に大人を攻撃するのは楽しいもんねエ！？　今の行動はきちんと罪に重ねておくからね。もっと罪を重くしたければもっと大声出していいんだよ、うふふふ。はいはい閉廷閉廷、これにて閉廷よ、ガキに時間と税金使うの勿体ねーっつの。傍聴席の皆さんは今のガキの精神的未熟さについて外で言いふらしまくるように」

彼女ももちろん怒りに震えていた、「あのですね、貴方は一体、」

裁判官「はいはいはい、閉廷したあとにいくらほざいても意味ねーからサセ子は黙ってる！ほんとのこと言われてご機嫌ナナメなんでちゆかねーえ？」

そのあと裁判官は、職員トイレの中で壁を叩いた。「糞っ！俺は裁判官だぞ！頭いいんだ、中卒野郎共とは違う！給料も高いんだ！なのになんで俺の女とガキは逃げてんだよ！俺もやりてえよ、若え女と！ガキをたった一回だけレイプしたからあの糞ビッチ、逃げやがったのか？ふん、法曹の俺を相手に勝てるわけないとわかっているから逃げやがったんだ！若者共め、許さん！まだ若くてまだ人生に時間や未来やチャンスがあるだなんて許さん！この俺が、人生の時間も未来もチャンスも奪いつくしてやる！今まで裁判官が不信任で辞めさせられたことはない！若者どもめ、楽しそうにしゃがって、まだ人生これからだと宣伝するように笑いやがって、クソっ、糞っ、拷問してやりてえっ！ナチスがやってみてえにめちゃくちゃにひどい拷問をおお！」裁判官は強く歯を食いしばった。顎を開けたら差し歯が取れた。裁判官は大声でわめきたてながら、「殺してやる！殺してやるーッ！」、その差し歯を踏みつけまくった。

傍聴席にいた一般人たちは、この裁判の不条理をネットで広めた。傍聴席にいたマスコミ陣はこの判決を、裁判官様の言うとおりに報道した。マスコミ業界と、あと彼女が言っていたような有識者(笑)とかは、法律とか条令とか規制を厳しくし、正しい性教育を今よりさらにカットした。そいつら「とりあえず未成年の軽率な性行為を批判しておけ。そしてもちろん、虐待とかする親も批判しておけ、そうすれば正義に見えるからな。アピールだ、アピール。あーでも具体的に児童相談所とかに予算回さないでいいから、現場の人にはガンバレってっいつとけ。正直な話、施設で子ども育てるとかさ、血税が勿体ねーし、そんならガキは死んでくれたほうがいいよ。虐待する親もさ、裁判やるとか豚箱にいれるとなると金かかるんだから。子どもはそのまま行方不明なままのほうがいいね。一番金かかんね。もしさ、ここで今回のあいつらを擁護したりとか、正しい性教育を広めようとか、育児施設の情報広めようとか言ったらさ、世間から批判されるのはウチらなんだから。今ある問題を今後起こらないように対策すると、必ずウチらが批判されるんだから。特に性の問題はな。若者にセックスを奨励するのか、とか言われちゃうよ。今ある問題を起こしている当事者を責めておけばいいの、そうすりゃ間違いないから。問題起こしているやつらが何か主張しても、人のせいにすんなって、世間の人がいじめてくれるから大丈夫。うん、若者の性の問題だけじゃなくてさ、雇用問題とかもさ、無職がいくら正しいこと言っても、人のせいにすんな自分で努力しろって社会が言ってくれるから。絶対大丈夫。ウチらは問題を抱え

ている当事者を責めておけばいいんだよ。そういう当事者は選挙来なそうだし、そういう当事者が嫌いな人らが、投票してくれるし。あ一でも震災とか原発とかだけは、避難しなかった奴らが悪って言うとなぜかウチらが辞職する羽目になるから、それだけは言うな。一日も早い復興をお祈りしますと言っておけ。てか性の話に戻るけどさ、若者だけが恋愛とかセックスとかしてむかつくよね。ウチらなんて愛冷め夫婦だし、セックスレスだし。若さパワーないし、将来の夢とかないし、疲れやすいし、物忘れ激しいし、頭はハゲるし、好きなアイドルはとっくに引退してるし、仕事忙しいし、稼いでも税金払わなきゃなんないし、年金払わなきゃ未納扱いされるし。若者は滅びろ。やつらの自由も時間も希望も潰せ。あ、まだ思春期迎えてない子どものことは、未来の宝とか言うっておけよな。子どもじゃなくて、いわゆる若者のことは、とりあえず責めていじめておけばOK。絶対大丈夫だって、社会ってそういうもんだから。ウチらは社会に生きてるんだから、社会のルールには従わなきゃ、違う？ 違わないだろ？ 違うとか思うやつがいたら、ウチらをひきずり下してみろってんだ、どうせ無理だから。違うか？」

大げさで極端だが、こういう構図のわかりやすい文章を書くのが、俺は大好きだ。

俺は、児童虐待で死んだ子どもたちの検死写真を見たことがある。

その子どもたちは、皮膚はあざだらけで変色し、身体のアチコチの骨を折られ、時には背骨や頭蓋骨まで砕かれ、内臓は潰され、痩せ細って骨が浮き出て枯れて萎縮して、糞便にまみれて、腐って、死んでいた。

児童相談所の事情も少し聞いた。

虐待は単純に当事者を責めるだけでは全然解決しないと知った。

他の問題も。

## 有罪中学生カップル2

---

「おい、あの足コプターって奴は、子どもを虐待するクソな親を擁護してるんじゃないか？」

「危険人物だな。そういう親とかはさ、どんどん死刑にしていけばいいじゃん。弁護のしようがないクズどもさ、殺すしかない。全部殺し終わった時に児童虐待の問題は解決されるんだよ！」

「あの足コプターってやつを、事故でも病気でも自殺でもなんでもいいから見せかけてぶっ殺せ！それが社会のためだ！」

## 地球の負け惜しみ

---

地球「ふふ、ついに俺を殺すことに成功したな、人類よ？　しかし聞いて驚くな、宇宙には第二第三第四の地球がある！　それに比べたら俺など弱すぎて、なぜ地球になれたかわからないほどだからな・・・　次の地球も汚染させてみる、できるものならな！　はっはっはっは！」

## 嘘をつかない政治家

---

「私の公約は、仕事について絶対に嘘をつかないことです。当選後の具体的な行動は、国民が自由に国の出納帳を閲覧できるようにします。もちろん国防に関わるようなとても重要なものは公表しませんが。スパイにもばれちゃいますからね。そして、同僚が嘘をついていたら必ず内部告発します。私を避ける政治家は何かを隠していて、私と仲良くしている政治家は信頼性が比較的高いということを世に知らしめます。また、騒音を出して迷惑になってしまうのがいやなので、選挙カーも出しません。」

その政治家は当選してしまった。

## 核実験のテロップ

---

米国の核実験の様子が生中継された。画面下のテロップにはこう書かれていた。  
「よい子はマネしてもいいですが、悪い子はマネしちゃいけません」

## 裸の王様はわいせつ物陳列罪で逮捕された

---

しかし、裸の女王様と姫様は絶大な人気を得た。それまでぱっとしなかった王族パレードにはたくさんの人が詰めかけた。パレードのチケットは毎回あっという間に完売、ネットオークションで高額で取引された。こうして、国は財政難を打破した。



## 命をくれてやれ

---

出撃するとき、上官は兵士たちを鼓舞した。

「OKお前ら命をくれてやれ！」

「イエッサー！」

「OKお前ら心臓くれてやれ！」

「いくぜおらああ」

「OKお前ら嫁をくれてやれ！」

「それはいくらなんでも」

「OKお前ら子どもをくれてやれ！」

「戦う意味がない！」

## 直ちに健康に被害が出るレベルではない

---

この発言に対し怒ったとあるテロリストは、国会に時限爆弾を設置した。

するとせーじかは言った、「ただちに爆発するわけではない」

こうして、時限爆弾は無事に爆発することができたのである。

何人かのせーじかがささやかに死んだ。

生き残ったせーじかは言った、「誠に遺憾である」

## 通り魔つあひゅっ

---

つあひゅっ という音がして、見ると俺の首から血液が噴き出していた。熱かった。俺は膝をついた。周りで声がする。

醜いおばさんがブルドッグみたいな口元を動かした。

「あらまー、違うじゃない。間違えちゃった。いやねえ、ほら、似てるもんだからつい。」

そんな。

俺の視界は、深緑色の網が何重にも重ねられるようにして急速に濁っていった。耳の穴と鼓膜との距離が無限大に引き伸ばされるように音が聞こえなくなっていった。

まさかこんな死に方とはね。

俺は心底驚いたものだった。

## 新入生歓迎会の思ひ出

---

俺が大学2年生の時、新入生歓迎会飲会の最中だった。いかにも学生向け飲み放題の店でのことだった。500円プラスすると飲み放題メニューで選べる酒の種類が増える。

「ねえ、何か面白いことやろう」とあるテーブルグループがみんなに提案した。

俺の向かい側の先輩がそれに答えた。

「ロシアンルーレットなんてどうですか？ 誰カリボルバー持ってなきゃできないけど」

「アタシ持ってるよ」と3年生の女の子がバッグから取り出した。周囲からは、用意がいいね、さすが、という声援が飛んだ。典型的な銀色リボルバーで、普通の大きさだ。最近「女の子だからといって軽くて小さな拳銃を選ぶのは負けだ！」というCMが繰り返されている。長く使った年季は読み取れなかった。

「で、ロシアンルーレットでいいの？」彼女が問うと、誰か答えた。

「いいとおもいまーす」男の高い声だった。

「6人、どうやって選ぶ？」

「テーブルごとにやっていけばいいよ」

「そうか、それで順番にね」

「全部のテーブルができるくらい弾ある？」

「あるよ。ぎりぎり」

「いいだしっぺのテーブルからやる？」

「いや、それは最後にとっておいたほうがいいんじゃないか？」

「そうか、なら最後に」

大きな飲み部屋の、いいだしっぺの隣のテーブルからやることになった。ここからスタートしてぐるっと一周し、最後にいいだしっぺテーブルがやるのだ。

リボルバーを持ってきた女の子がリボルバーを中折りして、元々装填されていた弾を一度全部抜いた。そのあとで、1発だけ込めた。指でぐるっと弾倉を回した。もうどこに入っているかわからない。

弾倉が回っているままで、ガチリと中折りを閉じた。銃の形に戻った。

女の子はファーストテーブルまで歩いて行って、4年生の男子部員に笑顔で渡した。

「じゃ、オレが、まず行くから」

彼が起立して、みんなが座った。さっきまではみんな好き勝手におしゃべりして笑っていたけど、今は静かに、彼に注目していた。みんな緊張し、集中していた。廊下のほうから、4名様入りますという店員の声が届いた。他の部屋からの他の飲み会のざわめきが聞こえた。そんな雑音は存在しないかのようにみんなは彼を見ていた。

彼が右のこめかみに銃口を押し付けて、撃鉄を親指で起こした。

「よし、はい、やるよ」

彼は目いっぱい目をつぶり、口を笑わせ、肩に力をいれた。

がちいん。

外れだった。

彼は緊張を解いて息を吐いた。

みんなも緩んで、「おお～い」と声を上げた。彼から視線をはずして久々に彼以外の場所を見た。

「まあ、最初だからね」

「うん、一人目からとかはないよね」

「ありえなくはないけど、ないよね」

「うん、ない」

彼は隣の女の子に銃を渡して座った。新入生の女の子で、さっき自己紹介していた子だ。

ポルノグラフィティとBUMP OF CHICKENが好きだと言っていた。

「え～ まじですか 怖いんですけど」と楽しそうに言った。

「大丈夫だって。2人目で当たりってのも、まだ結構ありえない。オレも大丈夫だったし」と彼が言った。

「“結構” じゃないですか」と彼女は笑いながらつつこみをいれた。

「うん、“結構” 大丈夫だよ」と、みんなはそこをわざと強調して声をかけた。みんなが言うものだから、同じような言葉が重なりあって聞こえた。

やがて彼女は撃鉄を起こして自分の右こめかみに当てた。みんなに顔が見えるように角度を変えて「まじこわい！」と笑いながら言った。目をつむって、

がうん！

彼女の脳が壁とテーブルに飛び散った。体もテーブルの上の料理やカクテルの上に倒れた。

みんなは「おお～」と歓声をあげながら拍手した。ぱちぱちぱちぱち。

「2発目で、もう当たりが出ちゃったかあ」「こういうのって結構レアじゃね？」と騒いだ。部屋の中は血の匂いでいっぱいになった。

みんなは彼女の死体を見に行った。だからその周辺に異様に人だかりができて、なかなか自分の席に戻ろうとはしなかった。携帯で写真を撮っていた。「カシャあり」とか「ぽわわうん」という撮影効果音達が聞こえた。俺は5杯目のカクテル(モスコミュール)をちびちび飲みながらその様子を見ていた。血の匂いがするのでいつもとは違う味だった。「うわ～ すっげ～」「かわいそうになあ」「ちょっと品のない死に顔だな」「てか臭えな」「壁紙がこんなに汚れちゃったねエ」「お店の人に弁償求められるのかな」とかコメントした。俺は人だかりが引いた頃に見にいった。近づくと血の臭いがさらにひどかった。あごが大きく開いていて、片方の眼球が飛び出していた。何より、あたりに飛び散った脳漿の量が半端じゃなかった。脳の本とか読むと色分けされたイラストが載っているものだが、実物は全部赤かった。テーブルから垂れ落ちた血が畳の上で面積を広げていた。脳漿を眺める俺に、誰かが「まじ半端ネエよな！」と声をかけた。

すぐそばで、最初にチャレンジした4年生の先輩が彼女の指をリボルバーのグリップからはがした。リボルバーにも血が沢山ついてた。

「はい！ 次のテーブル！ 誰からやる！？」

みんなはもう、さっきの彼女のことは忘れて、次のテーブルの方へ歓声と拍手を送っていた。

弾が一発込められて弾倉がまわされ、ガチリと中折が閉じられた。そして次のテーブルに渡された。

まだ始まったばかりなのだ。でも、ここで帰ると空気の読めないやつ認定を受けてしまうことを、俺は知っていた。

## 透視ビーム

---

「透視ビーム！」

「いやン やめてよ エッチい！」





白紙

---

白紙

## 夏の夜に窓を開けたとする

---

あなたが夏の夜、暑苦しくて眠れなくて、窓を開けたとする。そして蚊が入ってこないように、網戸を閉める。意外と涼しい風が入ってくる。

もう一度横になる。さっきよりは幾分安らかな心になっている。外からの音に耳をすませる。いろんな音が聴こえる。会話がある。女性の声だ。直後に、男性との声も聞こえる。その会話に、聴覚のアンテナを向けていく。少しずつ、少しずつ、会話の内容が聞き取れるようになっていく。完全には聞き取れなくても、欠けた所は心が自動的に補ってくれる。

大きな声でどなるように話しているわけじゃない。静かに話している。

でも、聴こえる。

「ぷしっ」という音が聴こえた。きっとビールの缶を開けたのだ。

「大学では何を勉強していたの？」と女性の声。

「生物学。主に生態学だ。環境とかね、そういうのもからめて」

「生き物が好きなの？」

「好きだね。でもそこそこだ。生態学は、あれはあれでよかったけれども、ああ、俺は生態学好きだよ。でも俺が一番やりたかったのは、ドイツ文学だ。

そうとも・・・ ドイツ文学」

「どうしてドイツ文学がやりたかったのに、生物学部に行ったの？」

「ドイツも好きだが、ロシアもいいな。まあいい。俺は高校時代、国語の古文ってものがどうしてもできなかつたんだ。古文だけじゃなくて、あれだ、えっと、漢文もだ。だから、まとめて古典と呼ぶべきかな。本当に、どうしても、できなかつた。

意義ってものもわからなかつた。どうしてさ？俺が、この俺がだぜ？ 現代人だぞ。どうして古文と漢文をやらなきゃいけない？俺はドイツ文学とロシア文学は好きだったけどね。日本の古典はちっとも面白くなかつたね。もののあはれ、とかもさっぱりわからなかつたね。特に病気になるって死にそうなのが美しいとかさっぱりわからん。ヘルツェンシトゥーベ先生みたいにさっぱりわからん」

「ドイツ文学も、ロシア文学も、一応古典じゃない。それなのに、なぜ、日本と中国の古典だけがだめなの？」

「・・・ それもそうだな。不思議だ。いや不思議じゃない。今わかつた。ドイツ文学とロシア文学は、日本語に、現代の日本語に翻訳されてる！でも古文漢文は昔の文のまま読むんだ。それは読めるわけないさ。

俺は英語ならできた。なぜできたかはわからねっけど。現代の英語だったからかもな。きっと英語でも何世紀も昔のだったらできないよ。理科系の科目も超得意だった。一応は現代の日本語で書いてあるもん。

ねえ、信じられるかよ？古典を高校でやるんだぜ？こてんをこうこうで！先生が黒板に書くんだよ。漢文を黒板に書くんだぜ？返り点とか書くんだぜ？まさに異様な光景だよ。それをみんなが、・・・ノートに書き写している！

しかもさ、ドイツ文学を大学でやるには、古典の試験を受けなきゃあいかんわけで。めちゃくちゃだ。論理が通ってない。どうしてドイツ文学をやるのに、古典がいるん？ 俺は先生に訊いたね。なぜ、古典なんか受けなきゃいけないのか。先生は答えた、日本の古典を勉強することで、ドイツの古典もわかるようになるよ、だと。そりゃ結構なことだな。一理あるかもしれね。でもそしたら、日本の古典を勉強しないとドイツの古典も勉強できないっていうのは、おかしい。その資格とか権利すら与えられねえってのはおかしいじゃないねえか」

「うん、なるほど」

「俺がドイツ文学を大学で勉強しているときに、ふと思いついたとする、日本の古典はドイツの古典を理解するのに必要だと。そしたらやればいいだけの話だろ。なんで入試の科目に日本の古典があるんだよ」

コト、カタ、という音が聴こえた。皿が触れ合ったのか、缶が触れ合ったのか、足を組みかえてそのとき何かに当たったのか。

「しかも俺が先生に質問した意味っていうのは、そういうことじゃなかったんだ。なぜ、という意味はさ、もっと、俺は、究極的な理由を知りたかったんだよ。どうして、そういう仕組みになっているのかってことを。でもね、あの先生はわかってはくれなかったよ。それでな、先生のほうから言うんだぜ、『どうして君は古典ができないんだろうね？』と。そんなの、俺が知るか。どういう意味だ、その質問は。国語の先生のくせに、わけわかんないことを言うぜ。ほんとわけわかんねえよ。俺はそれで、あの先生のことを嫌いになって、ますます古典はわからなくなっていったね。あの先生は、今後いい人生歩まないぜ」

「でも、生態学を大学で勉強したおかげで、私と知り合えたんじゃない。つまりは、ドイツ文学に行かなかったおかげで、私と知り合えた」

「・・・確かに！」

「きっと、生態学を専攻した意味はそこにある」

「意味、か。そうだな・・・。うん、そうだな・・・。

いや、それは結果論に過ぎない。運命的に考えればそうなるかもしれないけれど。でもそれは、運命的に考えればそうなるというだけじゃないか。俺は君と知り合うために生態学を専攻したわけじゃないんだ。

ああだめだな、うまく言えんけれど。こんなこと言うと、まるで君との出会いが、大切なものではなかったかのように聞こえちゃうかもしれない。そうじゃないんだ。

俺は、君と出会えて本当によかったと思ってる。確かに、結果的には、ドイツ文学に行かなかったおかげで、君と知り合うことができた。それは確かだ。

人生全体で眺めれば、ドイツ文学を専攻することよりも、君に出会えたことのほうが大きなプラスになったと思う。きっと、その通りなんだ。でもね、俺は高校時代、そんな先のことなんて知らなかったんだよ？」

「私とドイツ文学専攻とでは、私の方がいいの？」

「そうだ。君の方がいい。比較するのが変だけど」

ピーポーピーポーと、救急車の音が近づいてくる。不思議だな。この瞬間に、救急車を必要と

している場所があるのだ。救急車を呼んだ人はきっと慌てている。実に不思議だ。救急車が最接近したとき、会話は遮られ、聴こえなくなる。救急車の音が、今度は離れていく。まだ遠くでかすかに聞こえる。ピーポーピーポー・・・。

もう、さっきの二人の会話は、あなたの耳には聴こえてこない。会話の続きは聴こえてこない。どこで誰と誰が話していたのか、あなたに知るすべはない。

## 出会い

---

彼女は銀行のオフィスの窓口に座っていた。おとといも昨日も座っていたし、今日も座っている。それが彼女の仕事なのだ。銀行の窓口に座って仕事をする。客の相手をする。そうやってお金をもらっている身なのだ。

そこへ客の一人がメモを差し出す。さっ。

ああ 不幸なるかな

君のような美しい人に

このようなことを頼む僕をどうか許してほしい

僕は銀行強盗だ

そうつまり 僕は銀行から金を取ろうとしている 銀行強盗だ

そうだ 僕には金が必要なんだ

ああ 金

ああ そうとも

僕に金をくれないか ベイビー

僕がその金で何をしようと思う？

僕がその金で何をしようと思う？

僕はね その金で

君にこの世の あらゆるものをプレゼントしたい

僕はひと目みただけで

すっかり もはや 君の虜になってしまった

君こそ 僕の人生に 初めて意味を与えることのできる人だ

僕は誓う

僕は 絶対に絶対に

一銭たりとも

その金で自分にもものを買うことはない

全て君のために使う

金はそのためにある

君がそれで喜んでくれたら

僕は嬉しくなり 涙を流す

僕は君に喜んで欲しい

しかし おお そのためには

ああ 金が 金が 必要だ

ベイビー 僕に金をくれないか

ありったけの そう 金を

彼女も変な人だった。ズキューンとハートを撃ち抜かれてしまった。その音は彼女の体中を反響した。

ズキューン・・・・・・・・！！

そうして二人は結婚し、生まれたのがそう、あそこにいるあいつさ。

## ベッドにはうさぎがいっぱい

---

### ベッドにはうさぎがいっぱい

俺が家に帰り部屋に入ると、ベッドにはうさぎがいっぱいた。もこもこしててとっても可愛い。

「やっほー うさぎだー」と俺は嬉しくなって、ベッドにもぐりこみ、たくさんのうさぎを抱いた。暖かくてやわらかい。ずっと前から、こういうことをやってみたかったのだ。

うさぎたちはおとなしくて、ときどき、もこもこと動いた。それがまた可愛くて仕方がない。その日は気持ちがすごく安心して、ぐっすりと眠ることが出来た。

次の朝目覚めると、うさぎたちはどこかに行ってしまった。布団にはぽろぽろとしたうさぎのうんちが点在していた。やれやれ、またうさぎに一杯食わされた。全く、しょうがないやつらだなあ。でもまあ、俺もぐっすり眠ることができたんだし。俺の気持ちはとても平和で、満たされていた。

## かえるライフ

---

布団に入って耳を澄ますと、田んぼのかえるがけろけろと鳴いている声が耳に入ってくる。これがものすごく癒される。神経が癒される。最高だ。これで僕はかえるファンになった。

次の日早速、かえる取りを開始した。気味悪いくらい大きなかえるではなくて、ちっちゃくてぴよこぴよこ跳ねる可愛いかえるを集めた。かえるを捕まえるのは結構簡単なのだ。

水槽にいっぱいかえるが集まった。何にも考えていないような眼が可愛い。水槽の内壁に登ってくるのもいる。可愛いぞ、お前ら可愛いぞ。

その晩、僕はかえるの鳴き声に浸り、最高にリラックスした状態で入眠した。

僕は風呂を最近使っていない。シャワーで済ます。だから、浴槽にかえるを放すことにした。かえるたちは気持ちよさそうに泳ぎ、あっちにいたりこっちにいたり、壁に登ったり、へりで跳ねたりしていた。

僕が家に帰ると、かえるの半分くらいは浴槽から脱走し、家のあちこちの床に点在していた。壁に登っているやつもいる。窓にしがみついているやつもいる。可愛いから許す。

でも、間違えて一匹踏み潰してしまった。かわいそう。でも、僕はそれよりも、潰れたかえるをよく観察した。なるほど。小さい身体にいろいろ詰まっている。

なんだか部屋全体が臭くなってきた。動物園のような臭さだ。そこで僕は部屋のかえるを全部捕まえて、浴槽の中のものも捕まえて、再び水槽の中に集めた。水槽の蓋を開けて、そして田んぼの傍に置いておいた。お前ら、みんな逃げていいぞ。

次の日、水槽を見に行ってみると、9割が逃げて、1割は水槽の中で、またもや何も考えていない眼をして、けろけろと鳴いていた。

これだからかえるはやめられない。おたまじゃくしから育ててみたいものだ。けろけろけろ、けろ、けろけろけろけろ。



## B級映画妄想 クロコダイル・ハンティング

---

さっきシャワー浴びながら考えた「いかにもありがちな映画」の話をしよう。

映画の題名はおそらく「クロコダイル・ハンティング(邦題 THE HUNT ON THE LAKE)」

製作：1984年 アメリカ

最初、霧のかかった湖でボートを漕ぐカップル。女性はピンクのラフなドレスみたいのを着ていて、男性はジーパンにジージャン。

女性「ねえ 湖のこんなに奥まで漕いできて大丈夫なの？」

男性「大丈夫さ。何か怖いものでもあるのかい？ ふたりっきりになれた」

女性、周りを見渡しながら「霧が濃いわ。帰り道がわかるの？ ジョージ？」

女性が振り返ると、男性はいない。

女性「ジョージ！ どこにいるの？ 馬鹿な真似はやめてよ！ あたしほんとに怖いよ・・・

冗談はよして！ ねえ！ ジョージったら！ 返事して！ 全然面白くないわよ！」

カメラは湖水面を写す。ぶくぶくと泡が上がってくる。

女性「ジョージ！ ねえったら！ 返事してよ！」

ジョージはわかりやすいほどピンチなのに、女性はそれを信じようとせず、ジョージのジョークだと思い込もうとしている。それがこういう映画の登場人物というものなのだ。

女性は泡があがってくるのを発見する。

その瞬間！

泡に血が混じる！

女性「きゃああああ」

フェードアウト。

ででーん・・・ オープニングに入る。

黒い背景に白い文字が出る。

監督 . . . . .

主演 . . . . .

そしてタイトル。

THE HUNT ON THE LAKE が大きく映し出される。

タイトルが違ってる。新聞のTV欄に書いてあるのと違ってる。

でもTVの前の子どもは英語が読めないからそんなことには気がつかない。

日本の現実母親「なんだこれ つまんなそうな映画 ニュースみよ」

こども「変えないで！」

映画のシーンは湖畔へ。

翌日、警察が捜査に来ている。

太った警官「事件があったのはここか？」

背の高い警官「ええそうです」

太った警官「どっちにしる・・・俺だったらこんなところに彼女をデートに誘ったりはしないね」

部下数人「わははは 同感です」

太った警官と背の高い警官がブルーシートをはぐ。

ブルーシートの中から警官二人を映し出す視点。二人の驚いた顔をカメラが映す。

背の高い警官「なんだこれは！ ひどい・・・！」

太った警官「まったくだ・・・ いったいどんなにすれば人間の身体がこんなになっちゃうんだ！」

死体は映さない。

家の中でトランクスー丁で寝てる男が映し出される。当然いびきをかいている。当然だ。

その家の前にパトカーが静かに止まる。

太った警官が降りてくる。

「おーい ハリー！ いるんだろ！ 返事しろよ！」

こんこんこんとドアをノックする。どんどんどんとうるさくドアをノックする。

トランクスー丁男が目を覚ます。目を覚ますときの吹き替え音声は「ぐごお！」

一丁男「あんだってんだ、土曜の朝だってのに・・・」

一丁男はとりあえずたばこをくわえて、火をつけなくて玄関に向かう。

太った警官はひっきりなしにドアをたたいて「ハリー！ ハリー！」と叫んでいる。

この！ パンツ一丁男こそ！ この映画の主人公 ハリーである！

下に名前の紹介字幕が出る。

ハリー・マックイーン

(・・・)

一丁男「だれだあ？ よおっと！」ドアを開ける。「なんだ？ グレイクじゃねえか？」

会話の中で太った警官グレイクはハリーの過去と現在をそれとなく話す。

ハリーは昔警官だったこと、かつてグレイクとコンビを組んでいたこと、奥さんに逃げられたこと、今は引退して地元湖のレンジャーをやっていること・・・

ハリー「おいおいやめてくれよ、昔の話はこおりごりだぜ。で、オレにその事件を頼みたいってことかよ？」

グレイク「まあそういうことだ、ハリー。やってくれるな？」

ハリー「はぁん。警察も随分丸くなっちゃったもんだな」

ハリーは死体を見る。でも死体はカメラには映さない。特殊メイクとか人形に金がかかるから。ハリー「なるほどねえ。警察じゃあどうしようもないわけだぜ・・・ 犯人は人間じゃねえんだからな！」

グレイク「ところで、お前にこいつを預けたいと思うんだ。まだ新米だがよ！」

栗毛の新米「はじめまして！ スティーブといいます」

ハリー「おいおいやめてくれよ！ オレに子守りをさせる気か？」

グレイク「現場検証をこいつにしてもらおうんだよ！ お前にカメラを持たせたら湖に落としちまうぜ！ それに、お供はこいつだけじゃない」

そこにバイクに乗ってさっそうと現れるピンクでボディコンでドレスの金髪女！

ヘルメットを取ると金髪がなびく。

化粧が濃くて、金髪には部分パーマかかってて、口紅が濃くて、ちちが不自然なほどでかくて、アイシャドウが濃くて、うっふんな感じで、でかいイヤリングが濃くて、ところでこの人はなんでピンクドレスなんだ？流行ってたのか？ そしてマスカラが濃くて・・・

足コプターはさっぱりこういう人の魅力がわからない。

ほんとうにさっぱりみりょくをかんじゃない

しかし、ハリーは「わお、とびっきりの美人が現れたな」

ちなみにこの台詞を副音声で再生すると「Oh,Wow! What's going on here!?!」となります。

化粧の濃い女「おせじなんかいわなくていいのよ？」

ハリー「おせじじゃないぜ！ 誓うって・・・」

グレイク「彼女はアニタ。お前が引退したあとに配属した警官で・・・」

グレイクの話を聞いていないハリー「あんたどこからきたんだよ？」

化粧の濃いアニタ「コネチカットよ」

グレイク「お前とは逆にレンジャーから警官になったんだ、そして・・・」

ハリー「あんた、名前は？」

アニタ「アニタっていうの。よろしくね」

ハリー、スティーブ、アニタの3人でモーターボートに乗って湖に行く光景。

スティーブ「ぼくは昔から写真のことばかり勉強してたんだ・・・ でも平凡なカメラマンになんてなりたくなくて、警察官になったんだ！」

ハリー、アニタに向かって「あんた、結婚してんのか？」

アニタ「まだだけど・・・ 私って男運がないみたいなの」

ハリー「あんたみたいなヒトだったら、いい男もたくさん寄って来るだろうのによ！」

スティーブ「ねえ！ あれ、何かな！」

熱心に写真をとりまくるスティーブ。

アニタ「クロコダイルよ。大きいわね。でもあいつじゃないわ。犯人は」

ハリー「あんたの胸のモノのほうが大きいって！」

アニタ「もっと大きいのがいるのよ・・・間違いないわ！」

ハリー「オレのアレも大きくなりそう！」

TVの前にいる思春期前のこどもは話についていけない。

なぜか大雨が降って夜のシーン。なぜ夜までいるんだ。

ハリー「ぺちやくちゃぺちやくちゃ

それでよ オレの車ぶっ壊れちまったんだ！ ぎゃはは！」

アニタ「静かに！ 何か来るわ！」

ぬーんと向こう側に動く影。

スティーブ「なんだろう、あれ」

アニタ「スティーブ、・・・銃を構えて」

スティーブ、リボルバー拳銃を構える。

ハリーもショットガンを持つ。

そのとき、がぶりと大きな顎がスティーブの両足に噛み付く！

明らかにワニのはりぼて。眼球もうごかない。

しかしそんなことを気にしてはいけない。

この映画が作られたのは80年代なのだ。

我々はCGで眼が肥えているのだ。

スティーブ「うわあああ！ 助けて！ アニタ！ ハリィィィィー！」

スティーブはクロコダイルに向かって拳銃を乱射！

しかしひるまない！ 血すら出ない！

スティーブ「銃が効かないー！」

クロコダイルが2回くらい顎をがぶがぶやるとスティーブの胸まで飲み込んで、彼を水中にさらっていく。

アニタ「逃げて！」

ボートを一直線に飛ばすハリー。

なぜか洞窟がある。

アニタ「やつは今頃満腹のはず。襲ってこないわ」

アニタの化粧は崩れない。

そこで二人で焚き火して夜を明かす。

二人で一緒の毛布に包まる。

Hなシーンはなしだ！

なぜならこれは、硬派のパニック・アクション・ムービーだからだ！

次の日。

ハリー「昨日は大雨で吸えなかったからな うまいぜ！」

赤いマルボロ。ライトたばこなんてこの時代には多分ない！

アニタの化粧は崩れない。

ボートで広い湖を走る。

ハリー「どうだ？ やつは出そうか？」

アニタ「見て！ あそこに！」

でかいワニの影。

消える。

水面に銃を向けながらハリー「どこだ？ どこへ消えやがった！」

がぼむ！ 船体にかじりつくクロコダイル！

ハリー撃つ。しかし効かない。

ハリー「弾切れだ！」

クロコダイルの体当たり！ 船体が大きく揺れる！

アニタ「ああん！」

ハリー支える！ 「大丈夫か！？」

アニタ「それよりやつを！」

でかい口あけて現れるクロコダイル！

アニタ「これを！ ぶちこんでやるのよ！」

アニタはボートのガソリタンクを外してクロコダイルの口にぶっこむ。

アニタ「今よ！」

ハリー、たばこを投げる。どがぼん！

別角度から撮影したフィルムをスローモーションで3回繰り返す！

爆発炎上するクロコダイルの口！ そして静かに湖に沈んでゆく……。

ハリー「やれやれ。帰れなくなっちゃったじゃねえか」

アニタ「いいじゃないの。帰れなくたって。もう敵はいないんだし…… 今日の日曜日よ」

ハリー「そうだな……」

湖の反射光きらめく。シルエットになったふたりはキスを交わす……

フェードアウト。

TV版なのでスタッフロールはカット。

見たい人はDVD買ってください。

BDは出ません。

ナレーター「さああて！ 来週の洋画劇場は！  
錯綜する思惑！ 飛び交うサスペンス！ 一本の電話が全ての切り札！  
次週！ 6/22！ ダイアルZ!

再来週の洋画劇場は！  
集まるテロリスト！ やつらの殲滅のために特殊部隊が向かう！  
しかしそこで彼らを待っていたのは！  
6/29！ エイリアンコマンドー2！」

声の出演

.....  
.....  
.....  
.....

「イケメン二人組みでお台場のスイーツを食べ尽くす！  
こんなに大食いなの、イケメンじゃあない～！？  
カロリー無限伝説！ このあとすぐ！ チャンネルはそのまま！」

TVの前の子どもが気づくと、両親はもう寝ている。  
一人で歯を磨く。  
鏡に映る自分の姿が少し怖く見える。  
歯磨き粉の泡がたまってきたのを理由にして、歯を全て磨き終える前に口をゆすぐ。  
こどもの奥歯はそろそろ生え変わる。  
こどもは布団をかぶる。  
ワニが出てきそうで怖いとか、そんなことは全然思わずに眠る。  
こどもは思う、明日は土曜だってのに、部活の練習試合かぁ、さぼりたいなあ。

おしまい

## 読者の皆様へのお願い

---

足コプターから読者の皆様にご覧いただきありがとうございます。皆様にしか頼めない、重要なことです。それは、「この本が面白かった」と他の人に紹介して頂くことです。よろしくお祈りします。すっかり頼みましたよ。

## シュールで極端で残酷な短編集

<http://p.booklog.jp/book/62647>

著者：足コプター

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asicopter/profile>

乱丁・落丁本にお気を付け下さい。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62647>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62647>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ